
アンコール文化遺産啓蒙教育

—上智大学の国際貢献—

ニム・ソテーヴン

上智大学アジア文化研究所客員研究所員

はじめに

カンボジアにおける人材養成と文化遺産教育に関連して、私はカンボジア内戦のことを思い出すべきだと思います。なぜならば、約 20 年続いた内戦によってカンボジアは多くの点で、とくに教育分野で後退してしまったからです。ある国の教育システムがうまく機能しなかったなら、その国は発展することはできないでしょう。

内戦中、文化遺産教育は顧みられることがありませんでした。カンボジアにおける考古、文化、遺跡の保存や修復などの分野における大学教育の中心であった王立芸術大学は、1989 年に再び開校するまでほぼ 20 年間、閉鎖されていました。考古学部が再開されても、科学的な教育方法や教育に必要な設備も教材もありませんでした。さらにクメール・ルージュ時代を生き延びた遺跡保存官や考古学者は、ほんのわずかでした。人材の不足は解決しなければならない最大の問題でした。そのため、王立芸術大学は国際的な水準にある他の大学からの支援を必要としていました。

1991 年、王立芸術大学は再開してから初めて外国人の専門家から知識を得ることができました。それは、日本からやってきた上智大学の石澤良昭教授をはじめとする専門家グループでした。それ以来、王立芸術大学の学生が選抜されてアンコール遺跡国際調査団によってアンコール地域での実地教育を受けました。さらに考古学部と建築学部の学生が多数、奨学金を得て日本にやってきました。

こうしてみると、ソフィア・ミッションの目的はアンコール遺跡そのものの研究、保護、修復だけでなく、最大の鍵である人材育成であることがわかります。石澤教授に主導されたソフィア・ミッションは「カンボジア人によるカンボジアのための、カンボジア遺跡の保存修復」という哲学に基づく長期的構想 (Long Term Vision) を持っていました。カンボジア人学生を教育するために研究施設がシェムリアップに設立されました。現在のアジア人材養成研究センターです。この施設はカンボジアにおける日本初の、上智大学がその 21 世紀の国際構想 (International Vision) を実現するための拠点です。この施設のもうひとつのねらいは、アジアにおけるグローバル化に伴う社会問題とそれに関連した現象を研究することでした。

この報告は、主にカンボジアにおいて、上智大学がどのように国際教育に貢献してきたか、ソフィア・ミッションが初期に行った王立芸術大学学生の教育から現在に至るまでのさまざまな活動のあらましをみていきます。

文化遺産の保存と修復の歴史の概略

19世紀半ばの Henri Mouhot によるアンコールの探検と旅行記の出版以来、アンコールはヨーロッパを、とくにフランスを魅了し、大きな衝撃を与えてきました。それ以来、アジアで植民地の経営を進めようとするフランスにとってアンコール・ワットは遺跡の修復と研究における植民地政策の象徴になりました。

カンボジアがフランスから独立したのち、1960年に Norodom Sihanouk 王はアンコールを訪れました。それ以降、国王はカンボジアのナショナリズムの威信を高めるために、文化遺産の保護に対する関心を表明するようになりました。国王はカンボジアのナショナリズムのもとでの文化遺産の保護の必要性に対するひとつの答えとして、1965年に王立芸術大学を設立しました。王立芸術大学の設立は称賛されました。考古学、建築学、歴史学、民族学、そして遺跡の保存修復に関連した学科を作ることが計画されました。多くの学生が各学部を卒業し、そのうちの何人かは海外に留学し、勉強を続けました。その他にはアンコール地域で遺跡の保存修復、民族学の研究、考古学的な発掘調査などを行いました。

王立芸術大学の活発な活動は1975年、クメール・ルージュの支配が始まるまで続けました。クメール・ルージュの支配のもとで、多数の文化遺産が破壊され、遺跡の保護にたずさわっていた多くの人たちが犠牲になりました。その結果、遺跡や歴史的に重要な場所は危険な状態におかれました。1979年にクメール・ルージュの支配が終わった後、遺跡の維持と保護の活動がほぼそと始まりました。1989年まで、アンコール遺跡に対する新たな修復活動が複数の国によって行われました。その中にはインド、ポーランド、ソ連のチームが含まれていました。その後、日本の上智大学、フランスの EFEO (フランス極東学院)、アメリカの World Monuments Fund、それにドイツ、イタリア、インドネシア、中国などによって、アンコール遺跡群の保存修復が行われていました。

とくに上智大学のプロジェクトはアンコール遺跡の保存修復とカンボジア社会における人材養成の発展、その復興のよい事例を提供しています。このプロジェクトのリーダーは、カンボジアにおける遺跡保護についての最初の外国人専門家である上智大学の石澤教授でした。石澤教授はクメール・ルージュ時代が終わった直後の1980年にカンボジアを訪れました。その時、カンボジアは非常に困難で危険な状況にありました。

文化遺産教育における上智大学の貢献

内戦から20年を経た1989年に、クメール・ルージュの時代を生き延びたわずか4、5人の遺跡保存官や考古学者とともに王立芸術大学の考古学部と建築学部が再開されました。教官は Chuch Phoeurn 先生、Ang Choulean 先生、Pich Keo 先生、Hor Loat 先生、Uk Chea 先生などでした。考古学部の再開が可能になったのは、彼らが深くかかわり、努力を重ねたからでした。考古学部再開

にあたっての目標は、彼らの責任において、カンボジアの文化遺産という領域で若いカンボジア人学生を促し訓練することでした。当時、教材や教官の不足のためにわずか30人の学生が選ばれました。

再開から3年後の1991年、石澤教授に率いられた多くの専門家や教授が考古学部と建築学部での教育プログラムを開始しました。その当時、私はthe foundation course（基礎コース）に在籍していました。学部は5年制です。基礎コースはフランス語でClass de Propédeutique（予備課程）と呼ばれ、1年生から4年生まではLicence I～Licence IVと呼ばれました。私が外国人の教授から学ぶのは初めてでした。私は感動しました。考古学部と建築学部を卒業した学生たちは皆、いまでもそのころをよく記憶しており、こういう機会を得たことを決して忘れないでしょう。現在の王立芸術大学で当時のような機会がないのはなぜなのか、と考えている者もいます。

ソフィア・ミッションについていえば、学部における教育プログラムはその後上智大学研修所（現 アジア人材養成研究センター）での実地教育に変更されました。研修所はシムリアップの人たちが学校を意味するSala Sofiaとしてよく知られています。シムリアップには多くの遺跡や歴史的な場所、そして独特の文化があります。そしてまたシムリアップでは理論と実践の双方を学ぶことができていました。それ以降、考古学部と建築学部の学生が選ばれてアンコール地域での教育プログラムに参加するようになりました。プログラムは当時、1年に3回行われ、それぞれ15名以上が実地教育を受けていました。私は1994年からアンコール遺跡国際調査団のスタッフになる1999年までの間、このプログラムに参加する機会を得ました。

私が上智大学研修所で教育を受けているとき、石澤先生は私たちを遺跡に連れて行き、遺跡の歴史と遺跡保存の方法論について説明しました。そして先生は私たちに意見を述べさせ、みなで議論するように言われたことを覚えています。私たちにとってそれは外国人の教授から直接に学ぶ貴重なチャンスです。石澤先生の哲学は私たちが知るのではなく、ものを理解すること、感じることに、そして尊重することです。それは古代の人々の歴史、社会、伝統文化を理解すること、その当時から現在まで残されたものを尊重することを意味します。ある対象に触れるとき、人は少なくとも学び、理解する可能性を持っているといえるでしょう。

最も重要な目的は、石澤先生とそのチームが日本から持ち込んだ技術によって私たちを教育したのではなく、遺跡における実地の活動から得た経験に基づく方法論を試みたことです。たとえばこのような例があります。アンコール・ワット西参道修復プロジェクトは古代カンボジアの技法を用いましたし、発掘によって発見された遺物には現地の伝統的な儀式を行いました。私たちはこういう考え方を心から感謝しており、尊敬します。

ソフィア・ミッションのプロジェクトは、私たちがアイデアを出しそれを実行するような環境を整えてくれました。たとえば1998年、私たちはアンコール遺跡群の中、とくにアンコール・ワットとアンコール・トムでの清掃プログラムを立ち上げました。その時、町から来た不敬な人々が大量のゴミ（とくにプラスチック類）を捨てていました。私たちはバンテアイ・クデイ寺院に近いロハール村に住んでいる人を10人ほど招き、ソフィア・ミッションが提供した小額のお礼を払ってゴミ拾いプロジェクトに参加してもらいました。われわれのねらいはゴミを拾うことだけでなく、

村人が遺跡の価値をもっと深く理解すること、プロジェクトによってカンボジア人の訪問者に遺跡について考え、遺跡を尊重するようアピールすることでした。

石澤先生の指導と推薦のもとで行われているシェムリアップの研修所での教育プログラムの一方で、1997年から現在に至るまで20人以上のカンボジア人学生が来日し、上智大学、東京芸術大学、日本大学、神奈川県研修センターなどで学びました。彼らは遺跡の保存と研究に役立つ考古学、カンボジア古代史、保存修復学、遺跡エンジニアリング、古代建築、博物館学などの異なった分野で修士号や博士号を取得することを期待されていました。彼らのすべてが博士号・修士号を取得し、帰国して文化芸術省やAPSARA機構（カンボジア政府機関のアンコール地域遺跡保存整備機構）、文化遺産の保存修復の分野で働いています。

結論

これまでに述べてきたように、ソフィア・ミッションの目標は文化遺産保存の長期的構想における重要な認識である人材養成に焦点をあわせています。ハードウェアとソフトウェアは同時に解決される必要があります。仮にプロジェクトが遺跡の修復作業だけを考慮しているとすれば、そのプロジェクトは短命に終わるでしょう。ある修復作業が終わったとしても、100年200年が経過すれば廃墟になるでしょう。しかし人々への教育は長期にわたって続くに違いありません。なぜなら教育を受けた人々は次の世代を教育するからです。

一方、カンボジアの場合、アンコールの文化遺産保存修復は有形と無形の両面にわたって行われるべきです。なぜならアンコール地域には寺院遺跡があるだけでなく、信仰、伝統、生活習慣といった現在も生きている文化があるからです。これらの生きている文化は寺院の近くに住んでいる人々によって実践されています。寺院は人々の信仰や伝統的習慣が残っている限り生き続けることができます。ですので、遺跡も遺跡に住んでいる人々も救うべきです。

さらに、上智大学21世紀COEプログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」による4つの国際シンポジウムがシェムリアップのアジア人材養成研究センターで行われました。これらのシンポジウムでは、著名な専門家や教授をヨーロッパやアジア諸国から招いてグローバル化の中で起こるさまざまな問題を議論しています。またこれらのシンポジウムでは地域研究や国際関係論を含むさまざまな問題について、カンボジアと日本の若手研究者が研究成果を発表することができました。またカンボジアの学生にはこれらの国際的な議論を聞く機会が与えられています。

こうして、カンボジアにおける上智大学の文化遺産教育を通じた国際教育は、文化遺産保存修復に対する理解を深めることに貢献しています。異なった文化の相互関係は、互いに結びつくこと、平和に生きること、相互理解の世界に生きること、戦争のない世界に生きingことを表明しています。

【参考文献】

日本語文献：

石澤良昭

- 2001 「上智大学アンコール調査団の活動概要（2000年～2001年）」、『カンボジアの文化復興（18）』、上智大学アジア文化研究所、pp. 3-5

欧文文献：

Ang Choulean

- 2001 “La faculté d’archéologie”, Bulletin of the Students of the Department of Archaeology, Phnom Penh, November, p. 1 (in Khmer language) & p. 29 (in French).

Christophe Pottier

- 2000 “The contribution of the École Française d’Extrême Orient with respect to the Cultural Heritage of Angkor during the past 100 years”, *JSAS*, No. 18, pp. 253-262.

Nhim Sotheavin

- 2013 “Activities of the Sophia Mission and Cultural Heritage Education”, *Investigation of the Angkor Monuments*, Sophia Asia Center for Research and Human Development, pp. 25-53.

Ishizawa Yoshiaki, et all

- 1990 *Study on the preservation of historic cities and social cultural heritage development*, Cultural Heritage in Asia (5), Institute of Asian Culture, Sophia University, Tokyo.

Ishizawa Yoshiaki

- 1999 “Training projects 1991-1999: Project for training Cambodian specialists enters 9th year”, *Renaissance Culturelle du Cambodge* (16), Institute of Asian Cultures, Sophia University, Tokyo, pp. 283-287.

Ishizawa Yoshiaki

- 2006 “Setting a stage for Area-Based Global Studies: A report four International Symposia and a training session for young researchers sponsored by Sophia University’s COE Program”, *Asian Research Trends*, New Series, No. 1, The Toyo Bunko.



王立芸術大学の学生によるバンテアイ・クデイ発掘調査（現場実習）



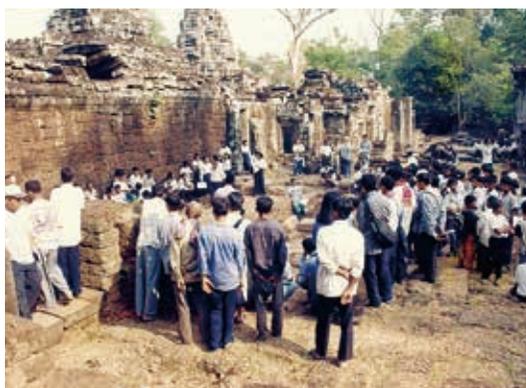
出土遺物整理作業（上智大学アジア人材養成研究センター 於シムリアップにて）



バンテアイ・クデイ内清掃作業（写真：荒樋久雄、1999年6月）



第1回遺跡見学会（現地説明会）の様子（写真：荒樋久雄、1999年）



*文化遺産にかかわる人材養成と教育とは、研究者・専門家養成にのみ寄与するものではない。それはまた、カンボジア人研修生を通じて知識・知恵を地域社会と共有するという活動も含む。